

# 『古事記』における「死」の豊穰性

## —イザナミ、ヒノカグツチ、オホゲツヒメの「死」—

外国語学部 国際文化交流学科 4 年

山田 妃奈乃

### はじめに

「死んだら人はどうなるのだろうか」このような疑問を誰しも一度は考えたことがあるだろう。死んでしまったら生前の記憶、意識その他何も残らず、「死後の世界」なんて存在しないと考える人もいるだろう。一方で「死後の世界」を想定することで死への恐怖を克服している人もいるだろう。「死後の世界」を想定して描かれた書物は世界中数多く存在しており、『古事記』もそのひとつである。「黄泉国」という死後の世界が『古事記』上巻に描かれており、そこでは古代の日本人が考えていた「死」の意味が映し出されているのではないかと想定される。

日本国語大辞典によると『古事記』とは、奈良時代の歴史書で上中下、3 巻から成っている。天武天皇の勅命で稗田阿礼が誦習した帝紀（天皇の系譜・皇位継承の次第を柱とする天<sup>ひえだのあれ</sup>紀）や先代旧辞（古伝承）を、元明天皇の命で太安万侶が文章に記録し、和銅 5 年（712 年）に献進したものである。上巻は国土形成の起源と王権の由来を神代の事柄として記し、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの国家の形成史・皇位継承の経緯を系譜と物語によって記す、とある。また、その目的について、日本大百科全書では

『古事記』作成の目的は、諸家に伝える各種の帝紀・旧辞を天皇の権威によって整理統一し、それによって天皇の権威をいっそう強め、天皇支配の正当性を歴史的に証明し合理化しようとするところにあった。

と書かれている。『古事記』は天皇家の正当性を

主張するための書物であり、上巻は天皇の由来を神代の事柄として記している。『古事記』では、アマテラスの孫にあたるニニギノミコトの子孫が初代天皇のちの神武天皇となっているが、ここで矛盾が生じてくる。それは、天皇の神聖さの根拠として位置付けられている古事記上巻において、天皇の祖先神アマテラスの出自は、元を辿ると死後の世界である「黄泉国」にたどり着くということである。「死後の世界」としての「黄泉国」が天皇家の出自となって良いのだろうか。それとも、アマテラスの出自と「死」が関係性を持つ確かな理由があるのだろうか。アマテラスの出自は『古事記』<sup>(1)</sup>において、

ここに、左の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、天照大御神。

「なが命は、高天の原を知らせ」（古事記、p.42、43）

と書かれており、イザナギが「黄泉国」からの帰還後、その穢れを落とすために水辺で禊を行い、左の眼を洗った時にアマテラスがうまれた。そしてイザナギはアマテラスに対して、「高<sup>たか</sup>天<sup>あまの</sup>原<sup>はら</sup>」つまり、天上の神界の統治をするよう任じている。しかしながら、「黄泉国」についての「あは、いなしこめしこめき穢き国に到りてありけり（古事記 p.40）。」私はいやな見る目も醜い穢い国に行っていたものだったよというイザナギの言葉に続いて、禊<sup>みそぎ</sup>を行い、穢れを祓うことで生まれた天皇の祖先神アマテラスは「死の穢れ」から現出したような描かれ方をしている。

また、『古事記』本文において、「死」が描かれる物語は合計で八つある。それは、順にイザナミ、ヒノカグツチ、天<sup>あめ</sup>の服織女<sup>はおりめ</sup>、オホゲツヒメ、八<sup>や</sup>俣<sup>また</sup>

のをろち、大国主、鳴き女<sup>め</sup>、天の若日子<sup>わかひこ</sup>である。その中で、本論文では、アマテラス誕生に関わるイザナミ、ヒノカグツチ、またその両者と類似した「死」のかたちが見出されるオホゲツヒメについて取り上げ、三者に見出される共通性から、なぜ天皇制神話において「死」の物語に関連しているのかを考察していきたい。

本論文ではまず、『古事記』のあらすじを述べ、第一章、第一節においてイザナミの「死」の経緯や身体に付いた穢れについて深く考察し、第二節ではアマテラスと「死」の穢れの関係性について述べていく。第二章ではヒノカグツチとオホゲツヒメについて「死」の経緯や死体に化成する神々の類似性から、「死」の意味を考察する。結論では第一章、第二章で挙げた神々の「死」から『古事記』上巻における一貫した「死」の意味をまとめ、アマテラスの至高性との関係性について結論付けたい。

以下より、イザナミとヒノカグツチに関するあらすじを簡潔に述べる。オホゲツヒメに関しては、第二章、第二節においてあらすじを述べる。

## あらすじ

男神イザナギと女神イザナミは天上世界、高天原から流離し、世俗世界に降りた。そして協力して国を生み、人々の生活行為に関わる神を生んでいた。しかし、イザナミは火の神であるヒノカグツチを生んだ際に火傷を患い死んでしまう。イザナギは悲しみに暮れ、ヒノカグツチを剣でもって殺してしまう。

その後イザナギはイザナミを追って、黄泉国へと向かう。出迎えたイザナミに現世へ還るよう請うが、イザナミはすでに黄泉の世界の食物を口にしたため（黄泉戸喫<sup>よもつへぐい</sup>）、夫の請いに従うのは難しいことを述べる。それでも愛する夫の出迎えを恐れ多く思い、イザナギに対して、黄泉国を支配する神と相談する間、自分の姿を見るなど告げて御殿の内に戻る。やがて待ちきれなくなったイザナギは、御殿内に入るが、そこには体中に蛆虫が湧き、腐りだれた妻神の恐ろしい姿がある。さらにイザナミの頭には大雷<sup>おおいかづち</sup>、胸には火の雷<sup>ほいかづち</sup>、腹には黒雷<sup>くろいかづち</sup>など、体に八種類の雷神がおり、イザナギは恐れて遁走し、必死の思いで世俗世界へと逃げ還った。そして世

俗世界と黄泉国の境をなす黄泉比良坂<sup>よもつひらさか</sup>を千人で曳くほどの重い大きな岩で塞ぎ、両神はその岩に向かい立ち、離別の言葉を言い放つ。

こうして、黄泉国から脱出したイザナギは、「汚い国に行っていたから禊をしよう」と、身に着けた衣服を脱ぎ捨て、水中に身を投じ、身を振りすぐ。それぞれ投げ捨てられた物からは八十禍津<sup>やそまがつ</sup>日などの神々が生まれ、最終的にアマテラス、ツクヨミ、スサノオの三貴子を左目、右目、鼻から生むことに成功する。そしてアマテラスには「高天原を領地支配せよ」とイザナギが命じる。

## 第一章 イザナミの「死」の意味

### 第一節 イザナミの「死」の経緯と「穢れ」

第一章では、イザナミが「死」に到る経緯をくもの>神という観点でもって考察し、死体の穢れからなぜ様々な化成神が誕生するのか、そして禊によってアマテラスが誕生した真意を追求していきたい。その中で、『古事記』神代神話に登場する神々はくもの>神を祀る祭祀者（祀る神）である点に留意する必要がある。そしてそのくもの>神の存在こそが「穢れ」として、人々や神々を「死」へと導いていくことについて述べていく。

くもの>神とは、佐藤によると、それ自体は目に見えず、また定まった形姿をもっていない。そして時や処によって異なった形姿をとり、それは世俗世界の事物・事象のはたらきから逸脱していて、ひとびとを怖じ恐れさせる。くなものか>であるくもの>神は、外部から唐突にやってきて、恐るべき災厄を引き起こす（佐藤 p.31）とある。つまり、くもの>神とは形姿は定まっていないが、祟り神のような存在であり、人々から恐れられる存在であることがわかる。

一方で、『古事記』に登場する神々は、くもの>神を祀る神である。例えばアマテラスは、アマテラス大神というくもの>神を祀り、その名を負っている。そしてくもの>神に飲物や食物を献ずるために田を耕し、饗応するために宮殿を造るなどの祭祀を実修している。神々による祭祀の成就によって、くもの>神の形姿の定めなさや荒々しさ・激しさは和らげられ、世俗世界の事物・事象との

通交の様態は衝突から融和へと転化する。

つまりくもの>神とは、人々にとって制御不可能な強大な威力を持つが、祭祀者により祭祀が実修されることで、本来もたらされるはずだった災厄が一転し、豊穰と富裕と安穏とに変容するのである。本論文で取り扱う、ヒノカグツチやオホゲツヒメも同様に、火に関するくもの>神や、穀物を生成するくもの>神を祀る祭祀者であることから論を進めていく。

神々は自身が祀っているくもの>神の威力の強大さゆえに祭祀を実修しきれず、自らや関わる神を「死」に追いやってしまう場合がある。

イザナミはイザナギと対を成し、「あなにやし、えおとこよ」、「あなにやし、えおとめよ」（古事記 p.30）とくもの>神の祭祀の実修をなぞり返し、性的交渉により国土を形成していった。そして、島々を生み終えると、次々と土俗の人々の住まいにかかわるくもの>神を祀る祭祀者を生む。ここから、イザナミは、イザナギとの性的交渉という儀礼において、国や神を生む生成的呪力を持つくもの>神の祭祀者と言える。しかし、ヒノカグツチを生む際に女陰に火傷を負い、病臥し、神生みが完遂していない状態で死んでしまう。死ぬ間際にイザナミの嘔吐物や糞に依り憑いて、鉾山の呪力を体現する祭祀者カナヤマビコ、カナヤマビメ、粘土の呪力を体現する祭祀者ハニヤスピコ、ハニヤスピメなどが現出する。イザナミは火傷を負い、イザナギとの性的交渉の祭祀が実修不可能な状態でありながら、自身の生成的呪力の残響として、これらの神々を生んでいると読める。そしてイザナギが亡き妻を追って見た醜惡な姿とは、

うじたかれころろきて、頭には大<sup>おおいかづち</sup>雷居り、胸には火の<sup>ほ</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、腹には黒<sup>くろ</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、陰には折<sup>さく</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、左の手には若<sup>わかい</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、右の手には土<sup>つち</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、左の足には鳴<sup>なる</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、右の足には伏<sup>ふす</sup>雷<sup>いかづち</sup>居り、併せて八くさの雷神成り居りき。（古事記 p.38）

とあるように、イザナミの体中に蛆虫がごろごろと音を鳴らして湧いており、体の八か所からは雷神が現出していた。このイザナミの形姿は、腐

乱死体であることは言うまでもないが、イザナミが本来担っていたくもの>神が、醜惡な姿に変わって露わになったとも言える。死ぬことでくもの>神への祭祀が行えず、統括が効かなくなり、肉体に依り憑いてしまったのだ。そして、佐藤によれば「イザナミの肉体の汚穢さはくもの>を生む呪的力能の消失に起因するのではなく、イザナギと対を形作ることからの離脱によって、くもの>を生む呪的力能が整序を失い、過剰になったことに起因している」（佐藤 2011 年 p.175）という。生成的呪力を管理できなくなったイザナミは、自身とくもの>神との距離を取ることができなくなってしまった。

イザナギにとってイザナミは愛しい妻であり、同時に、共にもの神を祀っていた対を成す祭祀者であったため、その身近な存在のイザナミの身体にくもの>神が露わになっている状態はまさに身の毛もよだつほど「畏<sup>かしこ</sup>畏」（古事記 p.38）む<sup>(2)</sup>ものであったのだろう。恋慕の情において成り立っていた存在だからこそ、その醜惡な姿に怯え、イザナギは逃走するのだが、それは「死」のケガレからの逃避でもあり、すなわちイザナミの身体に現出したくもの>神を祀りきれなかったこととなる。イザナギは黄泉津比良坂まで逃げ下ってきて、イザナミと離別の言葉を言い交わす。その際、愛しい対存在であるイザナギが統括する国に対して

「愛しいあがなせの命。かくせば、なが国の  
人草、一日に千頭絞り殺さむ」（古事記 p.39）

とイザナミが発しているのは注目すべき点である。イザナギが離縁するならば、お前の国の人間どもを一日に千人絞め殺すというのは、共に造った世界の破壊を意図していることとなる。生成的呪力のくもの>神の祭祀者であったイザナミは、自身の「死」を介して生前の威力が反転してしまい「死」をつかさどる神となるのだ。<sup>(3)</sup>そしてなお愛しいイザナギと関係を持ち続けるのだ。また、対するイザナギも

「愛しいあがな<sup>も</sup>に妹の命。なれしかば、  
あれ一日に千五百の産屋立てむ」（古事記 p.39）

と、両者とも互いを最後まで愛しい存在であることを伝えている。そしてここをもって、人々は一日に千人死に、千五百人生まれるという、生と死の起源譚となっている。そうして、千引きの岩でもってイザナミを封じ込めたわけだが、これは愛しい気持ちとは別に、自身の統括する葦原の中つ国に黄泉国の穢れを侵入させないための行動と読めるだろう。イザナギは黄泉国に対して「穢き国」という表現をし、更に体を清めるために禊みそぎを行っている。

ではイザナギの体に憑いた穢れみそぎを禊によって引き離すことは、どのような意味を持ち、アマテラス誕生へと結びついているのだろうか。第二節では、穢れの概念について詳しく考察し、また、穢れを正しく処置することでどのようなことが期待されるのか述べていく。

## 第二節 ケガレからハレへ

イザナギの「あは、いなしこめしこめき穢き国に到りてありけり。」という言葉から「黄泉国」に対して穢れの念を抱いていたことは窺えるが、はたして古代の人々も「死」に対して穢れを感じていたのだろうか。また、イザナギはその言葉に続けて、「かれ、あは御身の禊みそぎせむ」（古事記 p.40）だから、私は禊をしよう、と述べている。禊とは西郷信綱によると、「身に付着した穢れを海や川の水で浄める行法。」（西郷 p.272）とあるように、衣服を脱ぎ捨て、水中に身を投じることで、その穢れを祓っており、それによってアマテラスが生まれたことは前述のとおりである。

天皇の祖先神アマテラスと黄泉国の穢れの関係性を考察するため、第二章では、まず日本におけるケガレの概念について言及し、「水死体をエビス神として祀る信仰」を例に、ケガレは祭祀を通してハレという概念へと転換可能であることを述べていく。

波平の『ケガレ』によると、「日本人の信仰や儀礼の中に「ケガレ」または「不浄」という観念を見出すことができ、それらは単なる汚れとかきたなさとかいう意味をはるかに越えた意味内容を含み、儀礼的（宗教的）な価値を示すものだ」（波平 2009 年 p.17）という。つまりケガレとは、ハレという清浄で善いもの、特殊かつ異常である観念に

相反する価値体系である。不幸や病気、怪我、死、罪、人にとって悪である事柄、さらに不浄性を含み範疇化したケガレの観念が日本人の信仰と深く関わりあっていると言えるだろう。したがって、日本人の間で「死」をケガレとし、不浄なものとする考えは一般的なものであったと言える。そしてケガレは一時的なものではなく、不幸な事態をもたらすという点も忌み嫌われるべきものであった理由となる。

しかしながら、ケガレは忌み嫌われるだけの存在ではなかった。「水死体をエビスとして祀る信仰」を例に挙げることで説明していこう。水死体は無論、死のケガレと直接関わっている。波平の『ケガレの構造』によると、「長崎県壱岐郡勝本浦においては海上に穢れを持ち込むことは厳格な禁忌の対象であり、特に死の穢れは極端に厳しく排けられる。それにもかかわらず、水死体が幸運をもたらすものとして、漁民によって積極的に拾われている」（波平 1996 年 p.174）という。常に危険と隣り合わせの漁業に関わる人々にとって不幸をもたらす「ケガレ」は禁忌の対象であるが、水死体を発見した漁師は喜んで引き揚げ、エビス様として祀ったという。つまり、水死体は正しく祀られることで、勝本浦の漁師に豊漁をもたらしており、この信仰においては「ケガレ」は正しく祀られることで「ハレ」に転換されるという、価値の逆転が生じている<sup>(4)</sup>と言えるだろう。

そもそも古代人における神とは、中村によると、正面から向き合っていた自然界の猛威の反映であり、自然は人間に恵みをもたらすと同時に、恐怖や危険をもたらすものである（中村 p.151）という。これは先に説明したくもの>神と一致する。災厄をもたらすくもの>神は祭祀が実修されることで、豊穡や安穏をもたらす神へとなる。古代の人々が捉える「ケガレ」とくもの>神は類似した性格を持つと言えるだろう。

『古事記』において、アマテラス以前に禊によって生まれてきた神々の性質からも、ケガレからハレへの転換が読み取れる。身体を水中に投じて、最初に現出したのが、八十禍津日、大禍津日であり、これらの神は悪事や凶事の神であり、その出自に関しては「その穢れ繁き国に到りましし時に、



けがれ  
汚垢によりて成りましし神ぞ」(古事記 p.42)とあるように黄泉国の穢れから現出したと書かれている。世俗世界における諸悪の発生として、これらの神々が生まれてきたが、同時にその禍を直すために生成した神である、神直毗かみなほび、大直毗おおなほびも生まれている。そして、イザナミの死体に依り憑いた穢れを清めた最終形態として生まれたのがアマテラスであるので、制御不可能な威力を持つくもの>神の「ケガレ」は、イザナギによる禊みそぎの祭祀でハレの威力を持つアマテラスへと最終的に転換されたと言えるのではないか。くもの>神の世俗世界とは圧倒的に異なった強大な威力を留めつつも、ハレとして、至高性のあるアマテラスへと変換させることに成功できたと言える。

## 第二章 ヒノカグツチ・オホゲツヒメの「死」の意味

### 第一節 ヒノカグツチの死体における化成神

ヒノカグツチは母であるイザナミを、自らが祀っているくもの>神の火の性質により死に至らせた。しかし火という性質ゆえに火傷をするという単純なものではなく、ヒノカグツチ自身が祀っていたくもの>神の威力の強大さにあると考える。ヒノカグツチという名前は火のちらちらと燃える呪力を体現する祭祀者を意味し、他にヒノヤギハヤオ(火の焼く勢いが速く盛んな呪力を体現する祭祀者)、ヒノカカビコ(火の明るく輝く呪力を体現する祭祀者)という二つの名前を持つ。ヒノカグツチは祀るべきくもの>神の力能を整序しきれず、本来祭祀を行うべき一定の距離感をくもの>神と取ることができない、いわば一体化してしまっている状態だった。それゆえ、制御不可能な火の威力でもってイザナミを死に至らせてしまうのだ。

愛する妻を亡くしたイザナギの嘆き悲しみは深く、腰に帯びた十拳剣とつかつるぎを抜いてヒノカグツチの首を斬ってしまう。このイザナギの行動は

「美しき我がなに妹の命や、子の一つ木に易へ  
むとおもひきや」(古事記 p.35)

いとしいわたしのイザナミよ、そなたを子の一

人であるヒノカグツチに代えて死なせようとは思わなかった、という言葉からも、妻を失う原因となったヒノカグツチを感情的に殺しているように読める。西郷も『古事記注釈』において、「イザナギが十拳剣を抜いてその子カグツチの首を斬ったのは、その哀しみが怒りにまで昂じたものといえる」(西郷 p.219)と考察しているが、私はこの「死」の意味を捉えなおす必要があると考える。物語的に読むならば、ヒノカグツチはイザナギの怒りと悲しみの感情ゆえに斬り殺されたと言えるのだが、ヒノカグツチが実修できずにいたくもの>神の祭祀をイザナギが異なった形で実修したと読めないだろうか。佐藤は、「殺されたヒノカグツチの血や体に現出したイハサクラ十六人はヒノカグツチが祀りきれなかった火にかかわるもの神の呪力を分節し整序する祭祀者なのである」(佐藤 2011 年 p.56)と述べ、更に、その数の多さはヒノカグツチが祀っていた火にかかわるくもの>神の呪力の強さ・激しさを語っている(佐藤 2011 年 p.56)。と述べていることから、ヒノカグツチ自身が制御できずにいたくもの>神の強大な威力をイザナギが刀でもって斬るという祭祀を通して制御可能な安穏へと導いたのではないか。

そして、イザナミ同様「死」を介して、ヒノカグツチの死体からも化成神が多数現出される。殺されたヒノカグツチの首から飛び散り、剣に付いた血が神聖な岩にほとばしり付いて現出した神々、切り殺された死体から現出した神々、これらは二種類に分類できる。まず、前者について、『古事記』では

御刀みはかしの前に著ける血さき、ゆつ石村いはむらに走り就きて成りませる神の名は、石析いはさくの神、次に、根析ねさくの神。次に石箇いはつの男のの神。次に御刀の本に著ける血も、ゆつ石村に走り就きて成りませる神の名は、甕速日みかはやひの神。次に、樋速日ひはやひの神。次に建御雷たけみかづちの男のの神。次に、御刀の手上に集れる血、手俣くより漏き出でて成りませる神の名は、閼くら淤お加美かみの神。次に閼御津羽くらみの神。

とあるように、刀に付いた血が、神聖な石の群れにほとばしり、石に関する神々と、雷に関する神々、そして水に関する神々が生まれている。<sup>(5)</sup> ヒノカ

グツチが祀りきれずにいた火に関する＜もの＞神の威力は、そのままでは人々は使用することができなかった。しかし、人々の意のままにならない＜もの＞神を、祭祀によって分節し、世俗世界において活用することができる火へと変換させたと言える。

ヒノカグツチの死体においては頭、胸、腹、男根、左手、右手、左足、右足の発生箇所<sup>おおいがづち</sup>の八か所から山に関する神が現出する。そして興味深いのは、「大雷」<sup>まさかやまつみ</sup>などが現出したイザナミの腐乱死体の発生箇所<sup>おどやまつみ</sup>の八か所と全く同じだということだ。この類似性に関して、中西は、「頭に大雷がいる。山の神では正鹿山津見であった。『正鹿』に対して『大』が対応する。胸には火雷が居り、これは燃え盛る状態を指していて、<sup>おどやまつみ</sup>淤藤山津見の起伏ある状態と対応している。腹と陰にいる黒雷と折雷は、奥山津見神、闇山津見という奥深さ、暗闇の神格化と見合っている。手足の若雷、土雷、鳴雷、伏雷について見て行くと、『土』や『伏』は地上を這うような雷の印象、『鳴』は遠天に響く音だけの雷、『若』は小さな雷の印象で、これらは雷そのものではなく、中心からはずれた雷群ということにおいて、<sup>しぎやまつみ</sup>志芸山津見神・<sup>はやまつみ</sup>羽山津見神・<sup>はらやまつみ</sup>原山津見神・<sup>とやまつみ</sup>戸山津見神などという神々と対応しているのである。」(中西 p.4) とあり、死体から現出した神々の意味性と体の発生箇所がイザナミとヒノカグツチで対応していることがわかる。死体から現出した山、雷の両方の神々について、頭や上半身においては主要部であり、腹や陰部で一度奥深く、暗がる。両手足においては身体の端の方に向かって、威力が弱まり、また山の麓へと降りていくというイメージはできるのではないかな。

ヒノカグツチが担っていた、火にかかわる＜もの＞神の祀りきれないほど強大な威力をイザナギは剣でもって祀り、その血からは火にかかわる＜もの＞神の威力を分節するために数多くの神々が生まれた。つまり、『古事記』の物語ではイザナギの怒りや悲しみの感情ゆえに殺されたように見えるヒノカグツチは、実は儀礼的に殺されたというように両義的に読めるのだ。また、ヒノカグツチの死体からは人々が生活行為において使用することのできる火にかんする＜もの＞神を祀る祭祀者が現出していることから、「死」が終焉を表すのではなく、豊穡をもたらす

ものと描かれていることがわかる。

第二節ではオホゲツヒメに関して考察していく。オホゲツヒメはヒノカグツチ同様に、死体から穀物を化成させ、生成性においてはイザナミにも共通している点があるため、本論文で取り上げるが、そこに『古事記』において一貫した「死」の意味を見出せるのだろうか。

## 第二節 殺されたオホゲツヒメ

オホゲツヒメはイザナギ、イザナミの神生みの際にヒノカグツチの直前に生まれる。穀物または食物にかんする＜もの＞神の祭祀者であるため、神<sup>(6)</sup>が食物を乞い求めると、鼻や口、尻から様々な食物を取り出し、調理して献上していた。その様子を覗き見たスサノヲは露わなくもの＞神の醜悪さに耐えきれず、たちまちに殺してしまう。そこで、殺されたオホゲツヒメの身体から蚕や穀物が生まれてきたので、カミムスヒがこれらの穀物を取らせて、それぞれを種とした。

オホゲツヒメのあらすじは以上であるが、イザナミ、ヒノカグツチ両者に類似した点が見られる。自らの身体から、自在に食物を取り出せる能力は、次々と国や神を生んでいたイザナミの姿を彷彿させる。また、覗き見たスサノヲに殺されるという状況においても、イザナミが大雷などの＜もの＞神が身体に依り憑いている状態をイザナギに見られ恐れられる場面と類似していないだろうか。そして、オホゲツヒメも本来は＜もの＞神と一定の距離を保ち、祀るべきなのだが、自らは＜もの＞神に取り込まれてしまっているため、神に献上する食物を自在に取り出す絶対豊穡性を持つ。しかしながら、黄泉国でのイザナミの死体と同様、生成する能力の＜もの＞神への統制を失ったオホゲツヒメの姿は醜悪であったのだろう。したがってスサノヲは

けが たてまつ  
穢汗して奉進ると、すなはちその大宜津比売  
の神を殺しき (古事記 p.53)

とあるように、身体から食物を取り出すオホゲツヒメを穢れていると思って、殺したのだ。また、殺されたのちには、

頭に蚕生り、二つ目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。かれここに、神産巢日の御祖の命、これを取らしめて種と成したまひき。(古事記 p.53)

とある。ヒノカグツチがイザナギに殺された際には、火にかかわる<もの>神を整序するイハサクなどの神々が生まれてきたが、オホゲツヒメの身体からは、蚕や穀物の種が生まれてきた。オホゲツヒメが死ぬことで以前のように、自在に食物を取り出すことができる絶対豊穰性は消えてしまったが、死体から穀物の種が生まれてきた以後は、穀物の種を埋め、手入れをし、定期的で確実な豊穰を得ることができることを意味する。<もの>神への祭祀は、唐突に訪れる<もの>神の荒々しさを、世俗世界に定期的に豊穰をもたらしさせるために行う。その点で、食物に関する<もの>神をスサノヲが殺すことは、祭祀であり、一定の労力をかけてでも、定期的な豊穰を得ることができるという豊穰をもたらしたいえる。

### おわりに

本論文では、アマテラスと「黄泉国」における「死」の穢れの関係性を探るため、『古事記』に一貫した「死」の意味があるのではないかとこの考察のもと、論を展開してきた。

第一章、第一節では、アマテラスの出自となる「黄泉国」の穢れは、<もの>神という人々にとって抗うことのできない威力を持つ祟り神の存在であると考察した。そして第二節では、その「ケガレ」という観念は「ハレ」という通常の事態よりも善い状態を作り出す観念へと変換できることを「水死体をエビスとして祀る信仰」から読み取り、アマテラスの出自と「黄泉国」の穢れとの関係性を結論づけた。

第二章からは、ヒノカグツチ、オホゲツヒメは<もの>神の計り知れない威力によって「死」に至るが、その「死」はイザナギやスサノヲの感情的な殺害ではなく、儀礼であると考察した。<もの>神の人々の意のままにならない圧倒的威力を、分節することで、死体からは豊穰や安穏をもたらす神々が現出したと解釈した。

アマテラスの出自と「黄泉国」の関係性については、<もの>神自身や<もの>神がもたらす災厄はケガレとみなされており、そのケガレを禊によってハレへ転換するという祭祀によって解決できる。それゆえ、『古事記』が「死」の穢れを強調して描くのは、世俗世界には見出すことのできない威力を天皇の祖先神アマテラスと結びつけるためだったのであろう。

また、我々人間にとって半ばマイナスに見える災禍や死の起源を、日本最古の神話における神々の行動に裏付けられることができるのではないか。イザナミが「黄泉国」において、<もの>神を統括できず、悲劇的にも「死」をつかさどる神になってしまったことは、ある意味、誰もが抱える「死」への疑問について納得させるものでもあうだろう。ここにおいて、世界における「死」の必然性を見出すことができ、我々に精神的な安穏をもたらしていると読めるのではないか。

### 注

- (1) 『古事記』からの引用は、参考文献に挙げた『古事記』新潮日本古典集成に拠る。以下引用文献はすべて同様とする。
- (2) 死体を見ることによって、自らも死に至ると信じられていたから、恐れたのである。(古事記 p.38)
- (3) イザナミは黄泉津大神という名を新たに授けられる。
- (4) これに関しては、波平は「ケガレの構造」において、なぜこのような儀礼的転換が生じるのかについて確かな答えが出ず、疑問視している。
- (5) 頭注において、これらの神々について「血は火神の赤い焔または火花で岩(鉾石)を溶かす。そこで石析・根析・石筒の男のような強力堅固な刀剣神が化成する。速速日・極速日・建御雷之男の諸神は、火の根源である強烈な雷神であり、刀剣を鍛える火力を意味する。御剣の柄に集まった血が、手の指の間から漏れ出て化成した神が水神である。剣の霊気が雲となり水と呼ぶことの表象であろう(古事記 p.35、36)」と説明されている。
- (6) オホゲツヒメに食物を乞うたのはだれであろうか。通説ではスサノヲと解しており、西宮一民は八百万の神、すなわち高天原の祭祀者と解している。しかしこの出来事が追放以前の出来事であるならば、明示する必要なしに主語たりうる存在はアマテラスのみである(佐藤 2011 年 p.173)。とあるが、本論文においてはどうた存在については重要視しないため「神」という記述でもって論を進めることにした。

### 6. 参考文献

- 西宮一民『古事記』新潮日本古典集成  
西郷信綱『古事記注釈』ちくま学芸文庫 2005 年 4 月 10 日  
佐藤正英『日本倫理思想史』東京大学出版会 2003 年 3 月 11 日  
佐藤正英『古事記神話を讀む』青土社 2011 年 2 月 15 日  
中村修也『日本神話を語ろう』吉川弘文館 2011 年 8 月 1 日  
波平恵美子『ケガレ』株式会社講談社 2009 年 7 月 13  
波平恵美子『ケガレの構造』青土社 1996 年 12 月  
中西進『古事記抄：黄泉国神話』成城國文學論集 1980 年 3 月